Kカップロリ爆乳眼鏡っ娘
コスプレイヤーに
色仕掛け&パイズリで
貢ぎマゾにされちゃう話

Kカップ爆乳〇S眼鏡っ娘コスプレイヤーの色仕掛け＆パイズリで貢ぎマゾにされちゃう話

◇

――パステルピンクのカーテンと、電気スタンドの付いた学習机。
小さな部屋を背景にして、キャスター付きの椅子の上で、下着姿の少女が大きく脚を広げて座っている。
首から下だけが画面に映されて、顔はほとんど映らない。
そのせいで、体つきだけが印象に残ってしまう。
……ハートマークが散りばめられた柔らかそうなジュニアブラと、同じ柄の綿ショーツ。
いかにも、といったデザインが、むちむちと肉感的な彼女のボディラインをくっきりと際立てて、僕の目を釘付けにする。
特に　たゆっ♥　たゆっ♥　と、ブラをぱつぱつに張り詰めさせて、画面の中で重たげに揺れる、巨大な胸に……。
（……うわ、でっか……♡）
……何度も見ているはずの光景だというのに、僕は未だに感嘆してしまう。
少女の胸に実ったおっぱいの横幅は肩のラインを余裕で超えて、きっと背中越しにだってその丸みが見えるだろう。
……見せつけるようにわざとらしく背負った、防犯ブザーが下がった赤い革の通学鞄も、ほとんど横乳の影に隠れてしまっているのだから。
ブラの肩紐はその重さでぴんと張り詰めていて、ほとんど布切れ同然になってしまったカップ部分からは、深い谷間も、ぷにぷにと柔らかそうな横乳もはみ出し放題になっている。
片方だけで少女の頭ほどには大きいんじゃないか？と、勝手に邪推してしまうほどのサイズ感が、画面の中でたぷたぷと揺れている。
……本当に、そういう音まで聞こえてくる。
ブラの中で大きな胸が弾み、重たい乳肉が肌とぶつかって生む　たぷっ♥　たぷっ♥　という音を、スマホのマイクが拾ってしまっているのだから。
アニメや漫画で見たら、あり得ない、と思ってしまうような乳揺れが、実際に動画の中に収められて、こうして僕の手元にある。

少女が前かがみになると　どたぷんっ♥　と一際強く乳房が揺れ動いて、ふるふると揺れる。そしてそのまま色白な谷間をカメラに見せつけながら、重力に従って果実のように垂れる姿を見せつけて……。

乳肌にうっすらと透けた血管の色まで見えるほどにアップになって映し出されると、思わず指先を伸ばして、２０㎝はありそうな谷間のラインをなぞってしまう。

……ゴム入りの細い肩紐が、今にも千切れそうになって必死に乳重に耐えているのがはっきりと見えると、僕はいつしか、ごくんと生唾を飲んでしまっていた。

そんな反応を予め分かっているかのように、少女はわざとらしくブラの淵に手を伸ばして、爆乳を揺らしたまま、ブラの淵へと指をかけて……。

……隠されていたピンク色の先端が、ちらりと覗く。

そして、そして――。

――ぷつん、と映像は途絶えて、そのまま冒頭に戻る。

そしてまた、たゆっ♥　たゆっ♥　と、乳揺れの映像がループして、止まらない。

……いや、止められない。

たった１分ほどの動画だというのに、僕はもう１０分近く見入ってしまっている。

何度見たって、散々に期待を煽られる先は映っていないというのに……。

動画がループするのだって、自分でスマホをそう設定したから。

もっと見たい、ずっと見ていたい、そんな欲求が止まらない。

人混みがざわつきだした騒ぎ声も、気にならないほどに……。

「……先生♥　お待たせしました♥」

「……！？」

――不意に、僕を呼ぶ小さな声がする。

……動画に夢中になっていたせいで、気づかなかった。

慌ててスマホの電源を消すと、なんとか平静を繕って声の主へと視線を映す。

「えっと……、真凛（まりん）ちゃん、だよね……？」

僕の肩ほどの背丈の小さな少女、真凛ちゃん。

動画から、リアルへ。

まるでオーバーラップするように、僕の視界でさっきの少女と姿が重なっていく。

……そもそも「ように」ではない、本当に重なってしまう。
錯覚でも、気のせいでもない。
「はい……♥　オフだと……はじめまして……♥　ですね……♥」
もじもじと恥ずかしそうに声を震わせると、それに合わせて、身体のラインを大きくはみ出した胸が、Ｔシャツにテントを作りながらふるふると揺れる。
僕はそれを、眼前で見せつけられてしまう。
（ほんとに、でっかい……♡）
思わず、ごくん、と唾を飲む。
１４０㎝ほどの低身長にぎゅっと詰まってボディライン突き出した、肉感たっぷりの巨大なバスト。
本人は１０３㎝のＫカップだと言っているけれど、上半身のシルエットをまるごと「おっぱい」で埋め尽くして、臍のラインまで下乳が届くほどのサイズ感は、それ以上に見える。
そんな低身長爆乳な体型が、飾り気はなくとも可愛いらしい顔立ちと、どこか野暮ったい黒縁アンダーリムの眼鏡という、いかにもオタク少女らしい雰囲気のギャップで強調されて……。
「今日は……よろしくお願いしますね……♥」
と、真凛ちゃんがレンズ越しの上目遣いで僕を見上げる。
……ついさっき動画の中でおっぱいを揺らしていた爆乳少女が、あの身体の持ち主が。
――今こうして、僕の目の前にいるんだ――。
……コロコロ、カタカタと二人でそれぞれのスーツケースを転がしながら、タイル張りの歩行者デッキを歩く。その度に、僕の隣ではメロンどころかスイカほどもありそうな二つの膨らみが、どゆっ♥　どゆっ♥　と揺れて、視線を惹きつけてくる。
布地にラメの入ったメロンソーダ色のＴシャツに、大きな貝殻のようなブラカップのラインを浮かび上がらせながら……。
（本当に……頭より大きい……）
行く手に見える展示場の大きさなんか、どうでもよくなってしまうくらいのボリューミーな胸が、すぐ傍にある。
「……先生、疲れちゃってますか？」
毛先の細い、ぺたんとした前髪の下から、真凛ちゃんの瞳が僕をのぞき込む。
つい彼女のおっぱいを見てしまって上の空な僕は、ま

だ会場にもつかないというのに、心配されてしまっていた。
「……遅くまでポスターとか作って、荷造りもしてたからさ……ごめんね」
「大丈夫ですよ♥　ＤＭでも言いましたけど……。改めて、新刊作業お疲れ様です♥　先生♥」
真凛ちゃんが囁く「お疲れ様です」の響きはどこかしっとりと熱くて、聞いていて恥ずかしくなってしまう。
「ありがとう……。たぶん、会場で座ってればそのうち元に戻るから、いつものことだし……」
積み重なる恥ずかしさに負けて、思わずそう誤魔化してしまった。
……視線を釘付けにされるのは何も僕だけじゃない。
……僕たちを追い越して行く人たちも、思わず何度も振り返ってしまっている。
男女問わず、彼女に視線を送っては、本来の目的を思い出して歩いていく……。
……僕らが目指すのは、年に数回開かれる同人誌即売会。
その中でも大きな規模のものなのだから、まだサークル入場の時間だというのに、駅前のロータリーデッキには、たくさんの人が歩いている。
……今回の場合、僕はサークル主で、真凛ちゃんが売り子。
しかも、同人作家なら一度は憧れる「コスプレ売り子」なのだから……。
活動を初めて３年目でそんな憧れが叶うなんて、思ってもみなかった。
初めての即売会に、不安半分、期待半分で、真凛ちゃんは僕の隣を歩いている。
……改めて見せつけられる彼女のファッションは、既にこの時点で、何かのコスプレだと言われても納得してしまうほどに、わざとらしい。
ポップなロゴが大きくプリントされたメロンソーダ色のラメ入りキャミソールに、水玉模様のソックスをぱつぱつに伸ばす肉感的な脚を晒す、デニム生地のショートパンツ、そして、パステルカラーのリュックサックとスーツケース。
……僅かに癖の残る天然の黒髪ショートボブや眼鏡の似合う顔立ちを除けば、最近流行りの「メスガキ」を思わせるコーディネート。
まだ垢抜けきらない地味めな顔立ちと、可愛らしい服装のギャップが、いかにも年頃の少女が頑張ってめかし

込んできた、といった風に見えた。
天然の太眉を不安げにハの字にした、ノーメイクの童顔を見ると、コスプレなどではない、本物の「メスガキ」なのだと確信してしまう。
そもそも、僕は彼女の年齢を、事前に聞かされてきたのだから、全部分かっている――。
……最初に彼女のコスプレ垢を見つけたときは、半信半疑だった。
真凛、という名前は、もちろんハンドルネーム。
……プロフィールにたっぷりのスラングと「？」つきで書かれている年齢は、ＳＮＳの規約違反スレスレの二桁。
けれど、メディア欄に上がっていた、大人顔負けどころか、プロのグラビアアイドルにも負けないような大きな胸が際立つコスチューム姿や自撮りを見ていると、とてもそうには見えなかった。
年不相応に感じられるくらいに、ありえないほどに、真凛ちゃんのおっぱいは大きかったのだから。
そういうキャラ付けです、と言われたら、確かにそうだと納得してしまうくらいに。
……それから数か月、相互にフォローしあってリプライを交わすうちに、二人きりのＤＭを彼女に送るようになった。
「ほんとは、年いくつなの……？」
……会話を交わすなかで、思い切って僕は問いただしてしまった。
「……今年で卒業なので……、来年からは制服です♥」
と、言葉の上では遠回しにはぐらかしながらも、学習塾の鞄を背負った姿をＤＭにアップして、真凛ちゃんは生年月日入りの写真と共に、事実だと認めてみせた。
「……皆には内緒ですよ……♥　色々バレちゃうと怖いので……♥」
必要最低限の危機意識を持ちながらも、彼女はそこで止まらなかった。
「その代わり……よかったら資料で使ってください♥　わたし、先生の漫画……大好きなんです♥　おっぱいの大きさがコンプレックスじゃなくなるので……♥」
まるで口止め料でも渡すかのように、真凛ちゃんは自撮りを何枚も貼りつけてきたのだから……。
「わたしのバスト♥　１ｍより大きいんです……♥　だからクラスですっごく目立っちゃって……」
そんな、極上の誘い文句と一緒に……。
メディア欄には一度も上がったことのない、谷間どこ

ろかぽっちりと浮いた乳首の膨らみまで分かるような限界ギリギリのおっぱい自撮りの数々が、今も僕と彼女のＤＭ履歴に残っている。
　すっかり真凛ちゃんのバストに夢中になった僕は、それからも彼女とメッセージのやり取りを続けた。
　そして、２ヶ月ほど前、ちょうどこのイベントの申し込みを終えた頃。
「告知見ました！　先生の新刊すっごく楽しみです～♥」
　そんなＤＭが真凛ちゃんから届いたかと思えば、すぐに一つの提案が続いた。
「もしよかったら……私に、売り子させてくれませんか？　コスプレ売り子♥　やってみたいです♥」
　……願ってもみないことだ。
　告知ツイートだけで既に５００いいねを超えて、イラストのＲＴ数も３桁は当たり前。
　今回の新刊も、全て捌ければ数十万円の売り上げになるはずだ。
　ようやく、僕にも箔がついてきたように感じられて嬉しかった。
　そんな時に、更に真凛ちゃんから誘われたのだから、嬉しくないはずなんてない。
　そろそろ自分以外の人手が欲しい、そう思っていたとこだったし。
　コスプレじゃなくても、女の子の売り子がいるサークルを羨むことはあった。
　ようやく自分も、羨まれる側になれるのかもしれない。
　それが真凛ちゃんになるのなら、どんなに素晴らしいか……。
　……けれど、真凛ちゃんの年齢はぶっちぎりの規約違反で……。
　もしバレてしまえば、炎上は避けられないどころか、今後一生出禁だってありえるだろう。
　……真凛ちゃんに、売り子をしてほしい。
　でも、あまりにもハイリスクすぎる。
　……そんな気持ちは半々で、心の中で天秤のように揺れる。
「……着てほしいのがあったら……何でも言ってくださいね♥　水着とかでもいいですよ♥」
　まるでサンプルのように、沢山のコスプレ画像がＤＭに流れてくる。
　ビキニ、メイド服、ナース服、バニースーツ……。
　その全てで谷間をしっかりと強調して、自分の武器をアピールしてくる。
　……この爆乳を生で見られる上に、好きなコスプレま

でしてもらえるなんて……。
真凛ちゃんのおっぱいという大きすぎる錘が乗せられると、天秤が傾くのは、あまりにも簡単だった。
……むしろ、このおっぱいがあれば誤魔化せるだろう。
なんて、根拠のない確信まで湧いてくるのだから。
「分かった、売り子、よろしく頼むよ……。あとで衣装のリクエストもするね……」
……葛藤した割には、僕はあっさりと結論を出してしまっていた。
そのくらい、真凛ちゃんの誘いは抗いがたかった。
二度と、チャンスはないのかもしれないのだから。
これで断って他のサークルに掠め取られるなんて、想像もしたくない……。
一生の後悔どころじゃ、済まないだろう。
「流石にタダでしてもらう訳にもいかないから……しっかりお礼がしたいな、何がいい？」
お礼、という言葉で、自分の中の罪悪感を薄める。
「……そうですね……じゃあ……♥」
真凛ちゃんの答えは、想像以上に純粋無垢だった。
「……先生のこれまでの成果♥　全部欲しいです♥　私、ほんとに先生のファンなので……♥」
……そんな約束を交わしたこともあって、僕はずっと今日を楽しみにしていた。
願わくば、真凛ちゃんもそうであってほしい――。
「……うわぁ……おっきいですぅ……」
人混みの流れに乗るようにして建物の中に入ると、小さな少女は、初めて見る大きなホールの中をきょろきょろと見回す。
「逸れないようにね……マジで人多いから」
「はい……、気を付けます♥　迷子になったら嫌なので……」
そんな彼女を視界の端で流し見ながら、僕は入口で渡されたものを彼女に分けていく。
「……はいこれ、サークル入場用のリストバンド」
「ありがとうございます、先生♥」
また、彼女のどこか熱を帯びた声が聞こえた。
……リプライやDMでやりとりを始めたときからずっと、真凛ちゃんは僕のことを「先生」と呼んでくれる。
もちろん、こうしてリアルで会っていても。
ようやく売れ出した同人漫画家にとって、こんなにも嬉しいことはない。
これまでずっと一人でひたむきに活動してきたところに、まるでご褒美のように、彼女が現れたのだから……。

「これで先生とお揃いですね……♥」
真凛ちゃんは紙製リストバンドを巻いた、細い手首を嬉しそうに見せつけてくる。
口数の増え始めた真凛ちゃんの口調や声音には、どこか年不相応に大人びていて、どこかオタク少女らしい、漫画やアニメで覚えました、といった風の甘ったるさが見え隠れする。
この子は学校でも、こんなにもしっとりとした甘い声で、担任の先生を呼ぶのだろうか……？
言葉の響きだけが同じせいか、ふと、そんな想像が頭に浮かんでしまった――。

◇

「……私、着替えてきますね、設営手伝えなくてごめんなさい……」
そう言い残して真凛ちゃんがレイヤー用の更衣室へと入っていくのを見送ってから、十分ほどが経った。
……売り子がいようがいまいが、結局、ブースで用意するものは変わらない。
荷物の大半はテーブルを覆う布やお品書き、百均の商品を集めて作った自作のポスタースタンドくらいなのだから、自分一人でも直ぐに広げることが出来る。
……既刊と合わせて、今日のために必死で作った新刊を並べていると、達成感が湧いてくる。
ほんの二十ページほどの、まさに「薄い本」な成人向け漫画。
ビキニ姿の爆乳少女が大きく描かれた表紙を見ているとどこか恥ずかしくなるけれど、これだって自分が何日もかけて描き上げたものなんだ。
そう思うと、まだ始まってもいないのに、満足してしまいそうだった。
……本番は、まだまだこれから。
「当サークル設営完了しました……。っと……」
フォロワーに向けてＳＮＳで情報を発信すると、あとはチェックを待つだけになる。
「凄い……！　ネットで見るのと一緒だぁ……」
ぱたぱたと足音が聞こえたかと思うと、着替えおわった真凛ちゃんが机の前に現れる。
……初めて見る即売会のブースに、眼鏡の下の丸い瞳をきらきらと輝かせて。
それだけで、周囲がざわめいて見えた。
「……同人誌ってこんなに沢山作るんですね～」
机の上に積まれた同人誌の山を、ひとつひとつ眺めて

みせて、真凛ちゃんは感心したように息をつく。
「いっぱい売れるといいですね……、私も頑張って手伝います……！」
真凛ちゃんが着替えてきたのは、フードに牛耳のついた白と黒。まさにホルスタインそのものな柄をした、いかにもコスプレ用といった雰囲気の可愛らしいパーカー。それが、服の上からでも胸のラインが丸分かりになるほどにぱつんぱつんに張りつめて……。
「……先生♥　どうですか……？　……似合ってますか？」
真凛ちゃんは恥ずかしそうにもじもじと身体を抱きながらも、意を決したようにすぅ……、と深呼吸する。
「……パーカーの下も、ちゃんと着れましたぁ……♥」
大きな胸が深呼吸に合わせて更に膨らむと、揺れる爆乳を見せつけるようにして、パーカーのジッパーが下ろされていく。
……いや、下りていくんだ……。
どゆっ♥　と突き出した爆乳の膨らみは、真凛ちゃんが手を触れずともゆっくりとジッパーの金具を下ろしていってしまう。
影を作るほどに大きな胸のすぐ下でジッパーが止まると、上着のラインを無理やり押しひろげるようにして、ばゆんっ♥　と重そうな乳房が二つ、揺れながらまろび出る。
「……わたし、ビキニ着るの……♥　初めて、なので……♥」
初体験の興奮に肌を火照らせながら、彼女はぐっと胸を突きだしてみせる。
コスプレ用に作られた薄い生地の牛柄ビキニは、ほとんど布切れ同然の生地や肩紐を、ぱつんぱつんに張りつめさせていた。
そのせいで、火照った肌がうっすらと透けそうなほど。パーカーで隠していなければ、肩や脇がほとんど露わになってしまうような露出度の小さなトップスは、その大きすぎるバストのせいで、ほとんどマイクロビキニ同然に見えてしまう。
……彼女が普段着けているブラよりも遥かに小さいのだから。
油断すれば、今にもその先端、乳首が覗いてしまいそうな危うさがある。
ホルスタイン模様がプリントされた布地も細い紐も、ボリュームたっぷりの乳肉に埋もれて、横乳や下乳が　むにっ♥　むにっ♥　はみ出し放題になってしまっている。

牛乳

ブラジャーと違ってバストを寄せ上げているわけでもないのに、ほとんど型崩れしない圧倒的な乳肉のボリューム感が、僕の視線を捉えて離さない。
どこで手に入れたのやら、しっかりとコスプレ用の肌色ニプレスまで付けているのが、時折ちらちらとビキニの淵から見え隠れする。
それはつまり、真凛ちゃんの乳輪のサイズまで丸分かりだということで……。
（凄すぎる……っ♡）
感嘆してしまうのは、僕だけではない。
……規格外サイズの爆乳が、それを際立てる極上のコスチュームと一緒に露わになった途端、僕らのブースの周囲にある視線が一斉に真凛ちゃんへと注がれていく。
「でっか……」というため息交じりの声までもが、口々に聞こえてくるほどに。
そんな視線を感じて、真凛ちゃんは色白な頬を眼鏡の下で火照らせながら、瞳を震わせてしまう。
「……やっぱり……大胆すぎました……」
恥ずかしそうに腕で胸を隠そうとして、隠せない。
むにゅ♥　むにゅ♥　と形を変える胸のせいで、逆にその柔らかさを、重さを、衆人環視の中で強調してしまって……。
「……先生は……、どう思いますか……？」
恥ずかしいけれど、満更でもない、そんな表情を浮かべながら、真凛ちゃんは僕に問いかけてみせる。
「いや、凄く似合ってるよ……♡　本当に僕のイラストそのままだよ……♡」
思わず、声色に興奮が漏れているのが自分でも分かってしまう。
今回の新刊のヒロイン、１０３㎝Ｋカップを小さな身体に実らせた牛娘。
その豊満で早熟な身体は男を無意識に誘惑し、手を出してしまった相手には一生を壊すような破滅的な快楽をおっぱいだけで与えていく、魔性の爆乳少女の短編ストーリー。
サンプルの段階で、沢山のおっぱいフェチなフォロワーから「いいね」を貰えたのは嬉しかった。
……バストサイズをはじめ、身体のプロフィールは、資料として画像を送ってくれる真凛ちゃんを、そのまま参考にさせてもらった。
僕の肩ほどまでしかない１４０㎝ほどの身長、肉付きのいい５８㎝のウエスト、胸と比較すれば年相応に小ぶりな８３㎝のヒップ。
……左胸の付け根、谷間の淵にぽつんとついた乳ほく

ろまで、すべて一緒なのだから。
　かけたままの眼鏡を除けば、殆ど本物がそこに立っていると言ってもいい。
……そもそも最初から、今回の新刊は真凛ちゃんの送ってくれたこれまでの「資料」と、リクエストを聞いてくれる、という提案ありきで生まれたのだから、似合っているのも、ヒロインそっくりなのも当たり前のことだった。
真凛ちゃんをモデルに作った、最高のヒロイン。
それが僕の隣で、ほとんど現実になっている……。
「よかったぁ……」
　大きな胸を文字通り撫で下ろすと、むにゅん♥　と指先が沈んで、乳肌が形を変えて、また元の丸みに戻る様子がはっきり見えてしまう。
　性徴期真っ只中の胸はハリとボリューム感の双方を併せ持って、僕のすぐ横で、ただ呼吸するだけでもふるん♥　ふるん♥　と揺れてしまう。
　乳肌がほとんど露わになっているせいで、微かな動きですら　たぷっ♥　たぷっ♥　と波打って、僕の視線を誘ってくるくらいで……。
（……っ……♡）
　疲れのせいか、甘く勃起が始まってしまうのを、必死に隠す。
　もはや、メートル超えサイズの爆乳がすぐ傍にあるだけで、自分のモノが反応してしまう。
　どんなに資料を見慣れていても、グラビアアイドルやＡＶ女優どころか、二次元のイラストにすら負けないようなおっぱいが目の前にあるのだから……。
（……今日１日ずっと……こんな娘が目の前で……っ♡）
分かっていたつもりなのに、いざ本物を目の前にすると、早まった心臓の鼓動が戻らない。
我慢する、しない、という選択肢が浮かんでしまう時点で、もうほとんど彼女をそういう目で見てしまっているのが自覚できてしまうと、あまりにも恥ずかしい。
「……こっち側に立つと……緊張しますね……♥」
僕が必死に性欲を抑えている間にも、パーカーの裾から尻肉の丸いラインを覗かせて、真凛ちゃんは「売り子」になった自分を愉しんでいるように見えた。
僕が、そして周囲のサークルが、爆乳少女の牛娘コスに見惚れている間にも、開場時間は刻々と迫ってくる。
　……気づけば、新刊の修正・内容チェックが始まっていた。
　やってくるスタッフさんにパラパラとページをめくられて、性器の黒塗りをくまなくチェックされるこの瞬間

が、一番緊張してしまう。
少しでも漏れがあれば、大事な新刊のページに直接ペンで線を引かなければいけないのだから。
……けれど今回は、そんなスタッフの手つきよりも、隣で興味深そうにその過程を眺める少女の身体のほうが、気になって仕方がない。
それはスタッフ側も同じようで、同人誌のページを捲っているはずなのに、その視線は時折ちらちらと真凛ちゃんの胸へと注がれてしまっていた。
「……チェック終わりました、本日はよろしくお願いします」
「こちらこそ、本日はよろしくお願いします……」
チェックの担当者は返ってくる新刊を受け取る僕を羨ましげな目で見ると、名残惜しそうに、何度も真凛ちゃんを見ながら去っていく。
……無理もない、と思ってしまう。
同情と優越感が同時に湧いてくる。
低身長・Kカップ爆乳のオタク系眼鏡っ娘。
こうして列挙してみれば属性とおっぱいの暴力のような少女に会えることなんて、本当に千載一遇、奇跡みたいなものだ。
まして……そんな少女がコスプレ売り子として、サークルのブースに立っているのだから。
……他人の視点に立ってみれば、羨んでしまう気持ちは痛いほど理解できる。
僕自身、こうして活動を始める前から、即売会でのそんな光景を、羨ましく思っていた。
……でも……今は僕が、羨望の視線を浴びる側だ。
「……先生……♥　バレなくてよかったですね……♥」
……浮かれる僕の足元を掬うようにして、こっそりと囁かれるそんな言葉に、どくん、と心臓の鼓動が早くなる。
「……っ……」
……何も返す言葉はない。
……提案してきたのは真凛ちゃんとはいえ、このリスクを分かってイベントに連れ出したのは、僕なのだから。
けれど、この優越感を実際に味わってしまうと、そんなスリルも一緒に楽しんでしまえた。
「……大丈夫ですよ先生……♥　わたし、おっぱい大きいから……♥　誰も気づきませんよ……♥」
と、自慢げにわざとらしく　たゆっ♥　たゆっ♥　と横揺れさせて、僕に見せつけてくる。
ビキニに収まりきらない丸い横乳が、今にも零れそうになるほどに。

「……いや、その……っ」
……しどろもどろになる僕の答えを遮るように、ぶるるっ、とスマホが鳴る。
『投稿見ましたよー。……こっちも設営終わったけど、来れそうですか？』
ほとんど戦友といってもいい、相互フォローの作家仲間からのＤＭが、助け舟に思えた。
……そのせいでさっきのやり取りが有耶無耶になってしまうのが、幸運なのか、不幸なのか、僕には分からない。
真凛ちゃんがここにいることの危うさ自体は、何一つ解決していないのだから……。
「ご、ごめんね真凛ちゃん、挨拶回り行かなきゃ……。ちょっと、ここ任せていい？」
……真凛ちゃんの方に目を向けるたびに、つい数秒前の不安も忘れて、揺れる生おっぱいに釘付けになってしまうのが恥ずかしい。
ほんの僅かに身体を動かすだけでも全開になったパーカーから露わになった、まさに雌牛おっぱいそのものの爆乳がふるふると揺れるのだから……。
「開場までには、戻るからさ……」
「はい……♥　留守番ですね……♥　ほんとに売り子さんみたいです……♥」
嬉しがる彼女の頬は、緊張のせいか、高まり始めた会場の熱気のせいか、ほんのりと赤らんで見えた――。
「――今日はよろしくお願いします、お互い売れるといいですねー」
そんな挨拶を交わして、新刊を交換しあって、これで３つ目。
あれから次々に連絡が届いて、いつの間にか挨拶回りになっていた。
同じように同人誌を出す知り合いが増えていくにつれて、そして、こうして即売会に参加するにつれて、サークル同士の交流もだんだんと増えたのは、嬉しいことだった。
……すぐ戻るよ、なんて言っては見せたけれど、新刊を交換したり、ジャンルの話をしたりしていたせいで、もう２０分も経ってしまっている。
……ブースに残してきた真凛ちゃんのことが、気になって仕方がない。
正直、もはや目の毒と言っても過言でないほどの爆乳牛娘コスプレイヤーに耐えかねて、挨拶を言い訳にブースから離れてしまったのは否定できない。

年下の女の子相手に本気で勃起してしまった後ろめたさみたいなものが、まだ心の底に残っている。
その癖に、頭の中は色んな意味で、真凛ちゃんのことでいっぱいになってしまっている。
……変に絡まれたり、セクハラなんかされていたりしないだろうか……。
なにより、年齢がバレたりなんかしていたら……。
そんな僕の不安に応えるかのように、ぶるるっ、とスマホが震えて、真凛ちゃんからのDMの受信を知らせてきた。
もしブースにも相互フォローの知人が来たら連絡してほしい、とは言ったものの。
……その文面は、明らかにそういった事態とは違って見えた……。
『先生、これ見てください……♥』
　というメッセージの下には、既に彼女が何か書き込んでいる吹き出しが現れて、動きつづける。
　そして、メッセージの続きと共に、画像が、ぽん、と現れて……。
『わたしのこと、ＳＮＳに書かれちゃったみたいです……♥』
　スクショらしき画像には、盗撮されたらしい真凛ちゃんの姿がはっきりと映っていた。
　サークル参加の誰かが投稿した、画像付きの呟き。
顔はトリミングで隠されているものの、間違いなくそのむちむちとした身体つきは真凛ちゃんのもの。
　身体ごと横を向いているせいで、パーカーから零れ出る爆乳の厚み、ボリューム感がしっかりと写ってしまっている。
まだ幼い胸板よりも遥かに厚い　どゆん♥　と突きだしたＫカップの乳肉を、余すことなく堪能できるくらいに……。
『でも……♥　おっぱいのこと……褒めてもらえてました♥』
「おっぱいでっか……」という本文のことを見てそう言っているのか、相手のマナーの悪さなど彼女は気にも留めていないようで、本当に心配になる。
『大丈夫……？　すぐ戻るから……♥』
『大丈夫ですよ……♥　今日の真凛は大人なので……♥』
　そんなわざとらしいメッセージと一緒に、深い谷間をみっちりと寄せて強調した自撮りが送られてくる。
『先生が戻ってくるまで……♥　ちゃんと待てますから……♥』
　八の字の困り眉上目遣いでカメラを見つめる潤んだ瞳

の丸さは、眼鏡のレンズでより強調されて、その健気さをアピールしてみせる。
　そんな表情の可愛いらしさを完全に上書きするように、その下には二つの爆乳がみっちりと窮屈そうに、Ｉの字の谷間をくっきりと作り出して並んでいる。
牛柄ビキニの頂点では二つの乳首が膨らんでいるのが見えて、真凛ちゃんが興奮しているのが分かってしまう。
「でも、なるべく早く戻ってきてくださいね……♥　真凛、さっきからず～っとおっぱい見られちゃってるので……♥　傍にいてほしいです……♥」
（うっ……♡）
　盗撮と自撮りを連続で見せつけられ、どれだけ真凛ちゃんの身体が扇情的なのかを、たっぷりとアピールされる。
　どくん♥　どくん♥　と血流が速まって、股間にとめどなく送られていくのが自覚できてしまうから、恥ずかしい。
　気づけばズボンの裾に竿がくっきりと浮かび上がるくらいに、激しく勃起してしまっていた。
（……我慢、できるわけないだろ……っ）
　あんな谷間を見せつけられて、このまま隣でずっと生殺しに遭うことまで考えると、もう限界だった。
　……既にもう、歩くだけで勃起がジーンズの内側に擦れてもどかしい。
　今すぐにでも抜きたい、そんな欲望でいっぱいになってしまう。
　開場までは、残り２０分。
　オカズを探す必要もない。
（――１回だけ……♡　１回だけだから……♡）
　机の立ち並ぶホールから離れて、必死にトイレを目指す。
　走るな、という当たり前のルールを守るせいで、ズボンの中でぐりぐりと動き回る自分の竿の感触を、嫌というほどに味わわされる。
　僕は今、真凛ちゃんで興奮しているんだ。
　……そう、自覚させられて……。
　ようやく開いている個室を見つけて、ばたん、と個室のドアを閉めると、僕はもう必死になって、ズボンのジッパーを下ろして勃起ペニスを露わにさせていた。
　かちゃかちゃと金具が鳴る音も気にならないほどに。
　剥けかけの皮に触れて亀頭を完全に表に出すと、ぞわぞわと奔る快感に全身が支配されてしまう。
　戦利品でシコっている奴がいると思われても、もうどうだっていい。

（……抜きたい……っ♡　抜くっ……♡）
片手にはスマホを握りしめて、必死に画面を操作して、真凛ちゃんの写真を表示させる。
そもそも、我慢なんか出来るはずがなかった。
新刊作業で何日も抜いていないような状態なのに、これまで罪悪感とスリルに塗れながら散々にオカズにした少女が、あんなあられもない恰好で目の前に居続けるのだから……。
……ほとんど、餌を目の前にぶら下げられているのと一緒じゃないか。
下手したら、ただ隣でおっぱいを揺らされているだけで、射精してしまいそうなくらいだ……。
（真凛ちゃん……♡　ごめん……っ♡）
そうやって内心で謝る自分自身の情けなさすらも、ぐんぐんと勃起を激しくさせてしまう。
個室以外には誰もいないのか、トイレの中には自分が竿を扱く　にちゅっ♥　にちゅっ♥　という粘っこい音だけが聞こえる。
漏れ出した我慢汁がそのまま指に伝うのも気にせず、夢中でシコシコと竿を扱き立てながら、牛柄ビキニの似合う真凛ちゃんの姿を、それこそ舐めるように見つめなおす。
「でっか……♡」
と、思わず感嘆してしまうほどに・
汗ばんだ深い谷間までくっきりと見えるのだから、その艶めかしさを存分に味わってしまう。
（なんなんだよ……っ♡　なんであんなにでっかい乳してんだよぉ……っ♡）
目の前で自慢げに揺らされた二つの爆乳が鮮明にフラッシュバックすると、握ったままの自分の竿が興奮のあまり　びくっ♥　びくっ♥　と跳ねるのが分かってしまう。
もはや存在するだけで、僕のようなおっぱいフェチを完全に虜にして、興奮させてしまう、大人顔負けの魔性の爆乳。
「……真凛ちゃん……♡　真凛ちゃん……っ♡」
名前を呼んでいくに連れて、頭の中では自分が描いた牛娘のヒロインと、真凛ちゃんの姿がどんどん重なっていく。
ベッドの上にごろん、と寝転がった主人公の上に四つん這いで覆いかぶさって、目の前で爆乳を　ゆさっ♥　ゆさっ♥　と揺らしてみせる、まさに乳牛そのものな、お気に入りのシーン。
……むっちりと肉感的な爆乳牛娘の身体を存分に堪能

できる主人公が、羨ましい。
自分も牛娘の巨大なおっぱいから温かなミルクを吸わせてもらったり、２０㎝以上もある深い谷間でみっちりとパイズリされたりしてみたい。
真凛ちゃんのＫカップで、気持ちよくなりたい。
……甘えたい。
……そんなイメージを、そのまま投影してしまった。
自分よりも小さな少女の膝に抱かれて、おっぱいをこくん、こくんと飲ませてもらう、背徳的な光景。
小さな少女を組み伏せて、その身体に不釣り合いな爆乳にペニスを挿入れていく光景。
……何度も繰り返したはずの妄想は、「おっぱい」の概念さえ塗り替えるような本物の爆乳を目の前にして、ほんのりと胸元から漂う匂いや、揺れる乳肉の音までしっかりと味わわされると、より実感を増していく。
「――わたしのおっぱい、美味しいですか――？」
「――パイズリ、大好きなんですね……♥」
ただの書き文字だったはずの台詞を思い出すと、いつの間にか真凛ちゃんの声で再生されてしまう。
自分で書いた授乳手コキの手つきや、パイズリで揺れる乳肉を想起しながら、スマホの画面を穴が開くほどに見つめて、現実と想像をリンクさせていく。

そうすると、ただのオナニーに過ぎないはずの竿扱きが、いつも以上の快楽になって、竿を突き抜けていく。
「はふっ……♡　はふぅ……っ♡」
ペニスから身体中にしみ込むような快感が伝わるたびに、妄想がエスカレートしていく。
ラストスパートは、おっぱい誘惑、授乳を経てからワンシーン、膝上に腰を乗せてもらいながらの、子種を搾るための本気パイズリ。
僕の頭の中では真凛ちゃんに置き換わって、膝枕に腰を、股間を預けて、おっぱいに甘えさせてもらっている。
……もはやオナニーの手つきとも関係ない、頭の中で描いているだけの光景が、まるで本当に目の前のあるかのように感じられてしまう。
僕の竿をみっちりと挟み込んで、重量感たっぷりに包み込む103㎝、Ｋカップ爆乳。
ずり……♥　ずり……♥　と乳肌が竿を舐りまわして、じっくりと擦りあげていく感触まで想起出来てしまうのだから……。
むぎゅ♥　むぎゅ♥　と爆乳で竿をハグしてみせながら、牛娘の真凛ちゃんは、自分の谷間が雄を気持ちよくしていく、そんな優越感に酔うと、乳圧がより強くなっていく。

牛娘の真凛ちゃんが爆乳を挟み、揺らすリズムが、そのまま竿を扱くペースになっていく。
そのリズムがだんだんと速まると、きゅう、きゅうと金玉がせり上がっていくのが、自分でも分かる。
「あぁ……っ……♡　くるっ……♡」
……射精する。……してしまう。
もはや、理性では止められない。
「……出るとこ見てて……っ♡」
自分がリアルでそんな台詞を口走ってしまうとは、思いもしなかった。
そんな恥ずかしさも押し流すようにして、精液が込み上げてくるのが分かる。
出してもいい、と我慢を諦めると、もう決壊を止めることなど出来なかった……。
「真凛……っ♡　うぅっ……♡」
思わず呻き声が漏れて、それと同時に、便器の中へ　びちゅっ♥　びちゅっ♥　と音を立てて精液が吐き出されていく。
極上の絶頂小便に、尿道も竿も、玉も全て、ぞわぞわと震えて……。
（やって……しまった……）
……ぽたぽたと滴る白い雫が止まってくれない。
「はふぅ……っ……♡」
劣情を精液にして全部ぶちまけてしまった頭の中はじんじんと痺れて、どこか熱っぽい。
……全てを水が流れる大きな音に隠して個室を出ると、誰もいない男子トイレに安堵してしまう。
射精の余韻に震える手の中でスマホが着信を知らせると、その振動のせいで思わず取り落としそうになった。
真凛ちゃんの自撮りが表示されたままの画面に、本人からのメッセージが映る。
『先生のフォロワーさん来ました、どのくらいで戻りますか？』
『すぐもどるよ』
もはや、簡単な文章を打つことさえ、指が震えてままならない。
真凛ちゃんへの罪悪感と、まだじんじんと痺れるように熱を持った股間を隠して、僕は戻ることしか出来なかった――。